

埋文にいがた

No. 73
2010. 12. 24

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

平成22年度発掘調査遺跡の紹介

みやばなちょう 宮花町遺跡

(糸魚川市大字青海字黒岩地内)

宮花町遺跡は、青海川河口左岸の海岸部に立地します。遺跡の東方約280mには青海川が流れ、北方約100mには日本海が広がっています。現表土の下は砂層で、遺構検出面の標高は約6.5mです。一般国道8号糸魚川地区橋梁架替工事に伴い、平成22年8月～10月にかけて発掘調査を行いました。

調査により、室町時代、今から約600年前(15世紀前半)の埋葬地(墓地)であることが判明しました。検出できた遺構は、石列1列、埋葬人骨(土坑墓)15体(地点)です。この内、石列は現地表下約1.5m・標高約6.0m付近で検出しました。直径20～30cm前後の扁平な円礫が、長さ約28m・幅1～1.5mにわたり、東西方向にほぼ直線的に列を成して伸びています。石材は砂岩や安山岩が多く認められます。この石列付近から、計15体の埋葬人骨を検出しました。当初、人骨と石列とは密接な関連があるものと想定して調査を進めましたが、人骨の一部は石列の埋没後、上層から土坑を掘り込んで埋葬されていることが判明しました。いずれも生骨で、火葬骨は認められません。複数の鉄釘が伴って出土したものもあり、鉄釘を用いた木棺が一部で使用されていたものと見られます。副葬品はとてども少なく、土器や陶磁器類は全くと言ってよい程出土しませんでした。わずかに、古銭が16枚出土しています。古銭の多くは中国の北宋銭で、いわゆる六道銭として使用されたものと見られます。人骨の多くは成人人骨ですが、中には乳歯が残存し、10歳前後の子供と見られるものも存在します。人骨の遺存状態はそれ程良好とはいえませんが、出土した頭蓋骨の多くは顎や歯が分解せずに残存していました。成人人骨の多くは左右奥歯(臼歯)の内側が異常に摩滅しており、生前の生活や職業等を推測する上で貴重な事例と言えます。15世紀前半の土葬人骨の出土例は、新潟県内はもとより、北陸地域においてもそれほど多くありません。当時の海に面した糸魚川地域、北陸地域の葬送儀礼を知る上でも重要な事例です。

(藤村ヒューム管(株) 小池勝典)



調査区の立地(西から)



9号人骨出土状況(南から)



石列(南から)



15号人骨・古銭出土状況(南から)

こ さか い づけ 小坂居付遺跡Ⅱ

(新潟市南区小坂字居付177ほか)

小坂居付遺跡は鎌倉時代末～室町時代（13世紀後半～14世紀）の遺跡です。一般国道8号白根バイパス建設に伴い、平成21年度から調査を行っています。2年目となる今年度は4月～10月まで延べ6700㎡について発掘調査を行いました。遺跡は中ノ口川右岸の沖積地に立地し、遺構が検出できる標高は-0.7m前後です。今年度は昨年度調査した屋敷地の周囲に広がる水田の調査を行いました。

水田は昨年と同様に1面の調査を予定していましたが、調査が進むにつれ4面重なっていることがわかりました。これらの水田はいずれも洪水を被り、砂に覆われましたが、わずかに残った畦畔の高まりを頼りに、ほぼ元通りの水田区画を復旧したようです。水田の区画は長さ約220m、幅約160mで、昨年検出した水田区画より広い区画です。小畦畔（幅40～60cm）がほとんどで大畦畔はありませんでした。用水路はなく、標高の高い南西側の水田から標高の低い北東側の水田へと田伝いに水を引き込んだと推測されます。これは、南北の小畦畔に水口状に切られたか所があることからわかります。水は最終的に屋敷地の区画溝を兼ねた排水路に入り、標高の低い北側へ流していたようです。

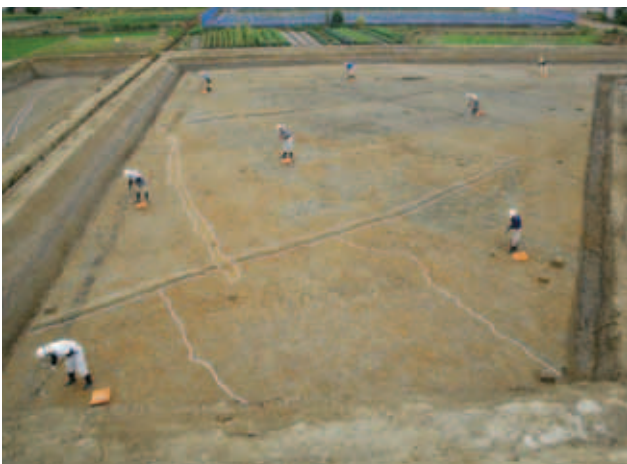
最下層で検出した幅1.6mとやや幅の広い東西方向に検出した畦畔は、表面に樹皮が敷かれ樹皮が動かないように中央を杭で留めていました。この樹皮を取り除き、畦畔を掘削したところ、人形が出土したことから、この場で祭祀を行っていたことがわかりました。この畦畔は屋敷地につながる畔道として利用されていたようで、樹皮を敷いたのは人が歩きやすいように工夫したものと考えられます。また、畦畔の盛土に粗朶を入れて畦畔の強化をしているものや、砂を入れているものがありました。村上市の西部遺跡でも古代の水田の畦畔に粗朶や砂を入れる例が報告されています。古代から続く畦畔の構築方法の一つだったようです。

通常、水田の1区画の比高差は10cm以上あると水が保持できないといわれていますが、今回検出した水田の比高差は大きいところで80cmもありました。これは水田耕作が行われなくなって遺跡が消滅し、周辺が潟のような状態になった時に地震を被り、液状化現象による噴砂が起これ、その後地盤が沈下したためと考えています。なお、この地震は、放射性炭素年代測定の結果から、14世紀末から15世紀中葉頃に起きた可能性が高いことがわかりました。

昨年度は屋敷地を調査したことから大量の木製品をはじめ、陶磁器・金属製品・石製品が出土しましたが、今年度は水田のみの調査であることから遺物は少なく、鎌・杭・人形・黒漆塗杓子・部材などの木製品が約8箱でした。

発掘調査は来年度以降も続きます。水田の構造や広がりがさらに明らかになると期待しています。

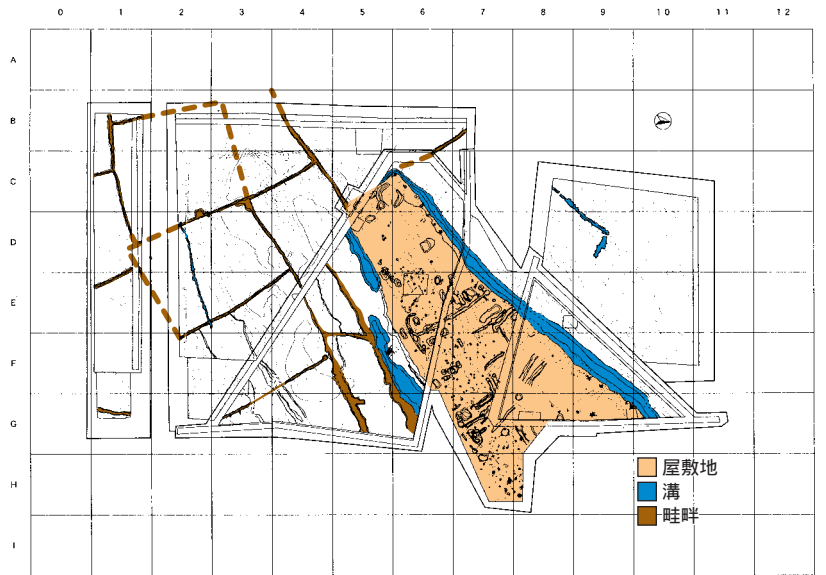
(佐藤友子)



第2面の水田（東から）



田面に残る足跡の調査



屋敷地と第2面の水田

埋文インフォメーション

現地説明会を開催しました

平成22年度は8遺跡の発掘調査を行い、延べ8回の現地説明会を開催しました。たくさんの方々に参加いただき誠にありがとうございました。本物の遺構や遺物を間近でご覧いただきながら、遺跡が営まれた当時の人々の暮らしや思いに触れる・・・現地でしか味わえない醍醐味であると言えます。

来年度以降も、皆様に発掘調査の様子や調査で分かったことをいち早くお知らせするため、現地説明会を開催していきたいと考えております。開催については当事業団のホームページ、発掘調査を実施している市町村の広報紙、回覧板等でご案内いたします。たくさんの皆様のご参加をお待ちしております。

開催日	遺跡名	所在地	関連事業	参加人数
6 / 19(土)	小坂居付遺跡	新潟市	8号白根バイパス	50
8 / 14(土)	野地遺跡	胎内市	日本海沿岸東北自動車道	21
8 / 21(土)	山口遺跡	阿賀野市	49号阿賀野バイパス	74
8 / 28(土)	下割遺跡	上越市	253号上越三和道路	161
8 / 28(土)	上道下西遺跡	三条市	北陸自動車道	20
10 / 2(土)	六反田南遺跡	糸魚川市	8号糸魚川東バイパス	82
10 / 8(金)	宮花町遺跡	糸魚川市	8号糸魚川橋梁架替	88
10 / 16(土)	山口遺跡	阿賀野市	49号阿賀野バイパス	156



六反田南遺跡（糸魚川市）



山口遺跡（阿賀野市）



「箸」あれこれ？

私たちの日常生活に欠かすことのできない「箸」。「菜箸」・「取り箸」・「迷い箸」・「涙箸」・「ねぶり箸」...など、その用途やマナーに関する様々な呼称があることも、生活習慣の中で重要な位置を占めていることの表れとも言えます。今回は私たちの生活と箸との関わりについて、その歴史を紐解いてみたいと思います。

箸食の起源

手食（手づかみ）や匙を用いていた食事法に、箸を用いる習慣が持ち込まれたのは、7世紀頃で、中国に派遣された遣隋使が中国式の食事法を伝えたのが始まりと言われていています。「唐箸」と呼ばれたことから、外来の習慣として持ち込まれたことが分かります。そして、当初は宮中や公的施設の役人など限られた階層で、主に儀式や供宴の時に使われていたようです。材質も様々で、天皇・貴族などは金・銀・鉄などの金属製のもの（ただし、鉄製は火箸として用いられたと言われる）を使っていたようで、奈良県東大寺正倉院の御物にも残されています。ただ、遺跡から出土するのはヒノキやスギなど木製の箸が多く、こちらが一般的であるようです。では、いつ頃から箸食の習慣が広く浸透したのでしょうか。8世紀の奈良の都・平城京跡では、平城宮（宮殿・官庁）に箸の出土が多く、庶民の暮らす市街地では少ない状況であったのが、9世紀の京の都・平安京では広く一般的に出土することから、この頃に庶民まで箸を使う習慣が広まったことが分かります。



写真1 中世の箸
(新発田市住吉遺跡)

新潟県内では、平安時代頃の遺跡の出土品に箸が見られるようになり、新潟市の場遺跡（8～9世紀）、同市緒立C遺跡（8～9世紀）、阿賀野市発久遺跡（9世紀）など、やはり公的な施設（官衙）や公的性格を帯びた遺跡を中心に箸が広まったと考えられます。ただ、箸は腐蝕して残らない場合もあること、燃料などとして再利用される可能性も考えられることから、いつ頃から庶民を含めた広い階層で使われるようになったのか、正確な時期の特定は困難です。中世には多くの遺跡で箸が見つかるので、平安時代～中世の間に広く定着したのではないかと推測されます。一方で、箸が井戸や河川の脇などから大量にまとまって出土したり、地面のあちこちに突き刺された状態で見つかることがあります。これらは「箸」本来の食膳具としての用途ではなく、祭祀具（箸状木製品）として用いられたとする考え方もあります。



写真2 井戸から出土した大量の箸
(新発田市住吉遺跡)

また、二本一組の二本箸とは別に、鳥の「クチバシ」のような竹製のピンセット形の箸（折箸）も古くから用いられていたとも言われています。宮中で行われる大嘗祭や神社等の神事において、古式に則り現在も使われています。この「折箸」は、食べるためではなく、現在の「トング」のように物を取り分けたり、よそったりするのに使われたもののようです。

「所変われば・・・箸も変わる」～箸食文化の国々～

一方、同じ「箸」を使う国々でも、その生活習慣や環境で、その形態などが大きく違います。ほんの一例ですが紹介します。韓国では食器を持ち上げず食べる習慣のため、箸（金属製）と匙をセットで使います。中国などでは、匙（散蓮華）と長い箸（木・象牙など）を使います。箸が長いのは、日本で使われるような「取り箸」がなく、食卓の大皿から直接取り分けるためです。また、中国の北方遊牧民は、移動生活であることもあり、各人が箸とナイフのセットを常に携帯しています。食卓での箸の置き方も、日本では個人に料理を供する「お膳料理（本膳料理）」の伝統から「横置き」、大人数が同じ食卓を囲む「円卓料理」の中国では「縦置き」と、全く異なっています。

人生の節目と箸

日本人の一生は「箸」に始まり、「箸」に終わるとも言われるくらい、人生の節目において箸が関連する儀

式を行う習慣が根ざしています。生後100日目に「お食い初め（「箸はじめ」、「百日」）」として、一日も早い成長と、一生食べ物に不自由しないようにという願いを込め、箸をはじめ食器を新調して、乳児に飲食の真似をさせます。一方、人が亡くなると、仏教式では天高盛りの一膳飯に箸を立てて枕元に供えます。故人があので食べ物に不自由にしないようにとの意味のほか、「立て箸」が死者の渡る三途の川の架け橋であるとも言われています。また、火葬骨を拾う時の「骨拾い箸」は、木製と竹製の箸を一对にして用い、二人で摘んで拾う、「箸渡し（二人箸）」をします。食卓で食べ物を箸で摘み合うのが「縁起が悪い」とされるのは、このことからきています。

「祝事の箸」「もてなす箸」と「清浄の美意識」

正月や結婚式など、お祝い事の席やお客様をもてなしたりする際には、特別に用意した白木の箸を用いることがあります。茶の湯の作法では、茶会の前に主人が自ら白木を削って作った箸を準備し、客を迎えます。また、神社で神饌（神様に供える食物）を供える際には、箸をはじめ、器も真新しい物を用います。このように接客や特別な儀式の際には、新しい箸（食器）を供するという習慣が様々な場面に根ざしていることが分かります。この場合の箸は使い捨てられることがほとんどで、一度きりの「使い捨て」が「最高の贅沢」であり、「潔く」、「もてなす心」という美意識がそこにあります。その意味で白木の箸は「清浄（清らかさ）」の象徴であると言えます。また、人の口に直接触れるものであるがゆえに、「使う人の魂が宿る」との考えから、他人との共用や使い回しを嫌ったとも推測されます。なお、白木の箸は、スギやヒノキなどのほか、ヤナギの木を用いることが多いようです。ヤナギについては、春に真っ先に新芽を吹く生命力や縁起の良さにあやかってのことなのかもしれません。写真3は村上市西部遺跡（平安時代）で出土した「耳皿（耳土器）」で、神様に供える箸の台として用いられるもので、現在も神社で同様の形のものが使われています。遺跡で何らかの儀式や神事が行われたのかも知れません。



写真3 箸と耳皿
（箸：出雲崎町番場遺跡・耳皿：村上市西部遺跡）

「塗り箸」・「割り箸」そして・・・「箸」の未来は・・・？

現在、普段使いの箸は漆などの塗料が施された「塗り箸」を一般的に使っています。塗り箸は江戸時代初め頃に若狭（福井県小浜市）や輪島（石川県輪島市）に始まり、武士階層を中心に広まった高級品だったようです。塗り箸が広く普及するのは明治時代以降と言われています。また、現在でもおなじみの「割り箸」は江戸後期頃、樽作りの端材や廃材を使って作られたのが始まりと言われています。本来、廃棄されるものを有効利用している点で、環境への影響は少なかったように思われます。

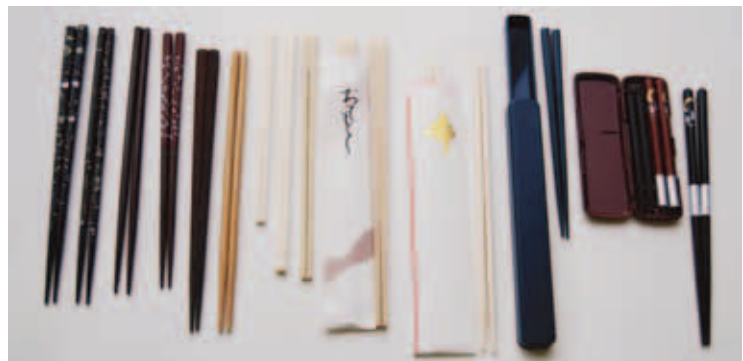


写真4 さまざまな箸
（左から漆塗り箸・木箸・竹箸・各種割り箸・祝事の箸・箸箱・携帯用のエコ箸）

しかし、近年は、私たちの暮らしがより一層便利になり、低価格競争や大量消費の生活は、さまざまな面で自然環境に大きな影響を及ぼすようになってきました。中でも、「使い捨て」「森林破壊」の象徴となった「割り箸」をやめて「エコ箸・マイ箸」など、繰り返し使うものや携帯用の箸の普及が進められています。

このように、箸は素材や形・デザイン・使い方や使う場面など、時代や生活習慣の移り変わりに応じて変化しています。加えて最近では食習慣のさらなる多様化により「箸」を用いず、ナイフ・フォークなど西洋式の食器のみを使って食べる機会がますます増えてきています。「箸」が私たちの食卓から完全に消えることはないでしょうが、「箸」の素材や形態は変わっても、美しい「箸使い」のマナーや伝統、「もてなす箸」の心は長く後世に伝えていきたいものです。【参考文献】一色八郎『箸の文化史（新装版）』御茶の水書房 1998 ほか 割愛

（尾崎 高宏）

県内の遺跡・遺物71

上ノ平・吉ヶ沢遺跡出土品(平成17年3月指定)

(遺跡所在地:東蒲原郡阿賀町熊渡)

上ノ平遺跡・吉ヶ沢遺跡は、阿賀野川左岸の河岸段丘上に立地します。磐越自動車道建設に伴い、県教育委員会が発掘調査を実施し、上ノ平遺跡A地点・C地点、吉ヶ沢遺跡B地点(以下、それぞれ上ノ平A地点・上ノ平C地点・吉ヶ沢B地点と略す)から後期旧石器時代(今から約1万5千~2万年前)の石器群を検出しました。

出土石器は2遺跡3地点で14,227点(上ノ平A地点:1,091点、上ノ平C地点:686点、吉ヶ沢B地点:12,450点)と多数出土しています。これらの石器は、中部地方北半~東北地方にかけての日本海側を中心に分布する「杉久保石器群」と呼ばれるもので、槍先に使われた「杉久保型ナイフ形石器」と木や骨の加工に使われた「神山型彫刻刀形石器」の2種類が特徴的に見られます。石器の形の特徴から3地点がおおむね同時期に形成されたと考えられますが、石器作りの在り方は大きく異なっています。

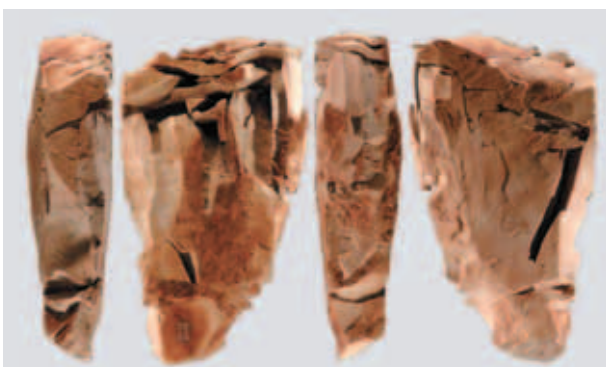
上ノ平A・C地点では、石器作りの際に出る石屑がほとんどなく、遺跡外から持ち込まれた完成品もしくはその前段階の素材(石刃)が出土品の主体を占めています。石材は、山形県で産出する珪質頁岩が8割以上を占めます。これは、石器の原材料が豊富な地域で完成品・素材が作られ、コンパクトな状態で遺跡に持ち運ばれたことを意味し、切れ味のよい良質な石材が遺跡の周辺にないため遠方から入手したと考えられます。

一方、吉ヶ沢B地点では、大半が近隣で容易に採取できる頁岩を用いています。原石から完成品に至るまでの一連の石器作りを行っており、出土した石の破片を接合していくと元の原石の姿が現れました。しかし、接合してできた原石にはところどころに隙間が見られます。この隙間に入るべき石の破片は、ナイフ形石器や彫刻刀形石器に加工され、消費されてしまったものと考えられます。このように石を割る方法やどの部分の破片を道具として加工したのかなど、石器作りの過程をより具体的に復元することができます。これら地点間の石器作りの在り方の違いは、遠隔地の石器及び石材が尽きたため、キャンプ地周辺で採取可能な石材を用いて不足分を補ったことによると考えられます。

両遺跡出土品は、資料の質・量ともに充実しており、「杉久保石器群」の典型的かつ代表的な事例の一つであるとともに、石器作りの在り方を通じて当時の物の動きや人々の行動を考える上で重要な資料です。



上ノ平遺跡C地点出土石器
上段:ナイフ形石器 下段:彫刻刀形石器



吉ヶ沢遺跡B地点出土石器
石器作りの過程を示す接合資料

埋文にいがたNo 73

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93番地1
TEL (0250) 25-3981
FAX (0250) 25-3986
e-mail: niigata@maibun.net
URL: http://www.maibun.net
印刷 阿部印刷株式会社